

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

民博通信 Online no.3; 表紙,目次ほか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009682

みんぱく
つうしん
オンライン

民博通信

No.3
2021

— online —



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

民博通信

— online —

| No.3
| 2021

『民博通信 Online』について

国立民族学博物館は、文化人類学や民族学研究のセンターとして、世界の諸民族の社会や文化の研究を進めるとともに、その成果を出版などのかたちで発信しています。

現在、本館では、人間文化の新たな価値体系の創出を目指す「基幹研究プロジェクト」、現代の人類社会が直面する課題の分析を目的とする「特別研究」、特定のテーマについて館内外の研究者と一緒に研究を進める「共同研究」などをおこなっています。

『民博通信 Online』は、本館において実施している個々の研究プロジェクトについて、その学術的な特色や独創的な点、導きだされた成果などを、研究者や一般の方々にわかりやすく発信する雑誌です。

表紙写真

飼育下の親鳥が雛に餌を与えているところ（中国雲南省大理白族自治州、詳細は本誌10-11頁）

CONTENTS

| Start up

基幹研究 データベース「焼畑の世界—佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開

五木村での「佐々木高明の見た焼畑」展—フォーラム型展示の可能性を探る
池谷和信 ————— 4

基幹研究 津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良

フォーラム型情報ミュージアムとしての「津波の記憶を刻む文化遺産—寺社石碑データベース」
日高真吾 ————— 6

基幹研究 セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化

ソニンケによる「文化週間」の映像データベースの構築
三島禎子 ————— 8

共同研究 日本列島の鶺鴒文化に関する T 字型学際共同アプローチ—野生性と権力をめぐって

権力と結びつく野生性—鶺鴒文化から考える
卯田宗平 ————— 10

共同研究 戦争・帝国主義と食の変容—食と国家の関係を再考する

戦争と食の多様な関係
宇田川妙子 ————— 12

共同研究 海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み

「人類学 back home」に向けて
片岡樹 ————— 14

共同研究 環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から

北太平洋先住民社会に関する比較研究構想
岸上伸啓 ————— 16

共同研究 月経をめぐる国際開発の影響の比較研究—ジェンダーおよび医療化の視点から

月経衛生対処という開発介入とローカルな月経観、女性の身体
新本万里子 ————— 18

共同研究 不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う—モノ、制度、身体のみあい

人とモノを媒介する場所という視座
森明子 ————— 20

共同研究 「描かれた動物」の人類学—動物×ヒトの生成変化に着目して

動物描写から「人と動物」を再考する
山口未花子 ————— 22

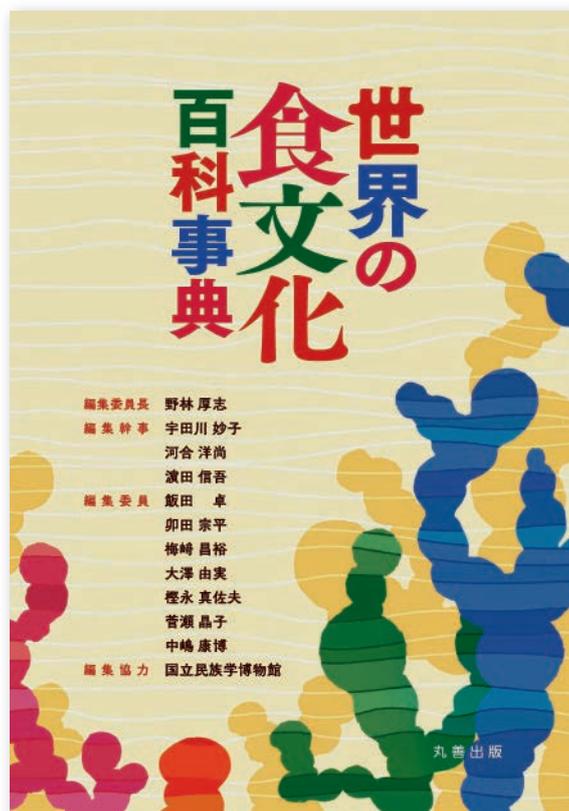
共同研究 先住民と情報化する社会の関わり

デジタル時代の先住民研究を目指して
近藤祉秋 ————— 24

新刊の紹介 ————— 26

国立民族学博物館の研究 ————— 30

本館では、館外での出版物を奨励する制度があります。★の印は、その制度を利用して刊行された出版物です。タイトルをクリックすると詳細情報に移動します。



世界の食文化百科事典

野林 厚志 他編

定価：本体20,000円＋税 716頁 丸善出版 2021年1月29日刊行

本書は、人間にとって栄養学的な充足を満たす以上の役割を担う「食べる」という行為について、食研究のアプローチ、自然・生態、身体との関係、食の多様性、現代の動態を扱う章にくわえ、世界の諸地域で育まれた食文化を地域ごとに紹介する百科事典である。本事典は、食文化の体系を文明論的な視野から捉えて理解するための基礎的・学際的な知識を得る手引きとなる。

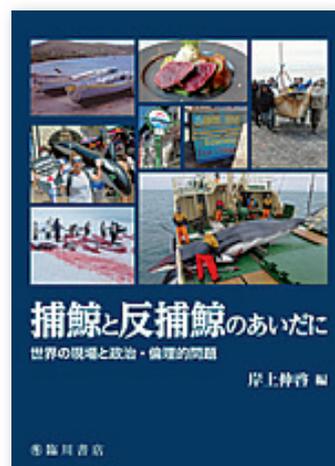
捕鯨と反捕鯨のあいだに —世界の現場と政治・倫理的問題



岸上 伸啓 編

定価：本体4,000円+税 336頁 臨川書店 2020年11月30日刊行

とくに大航海時代以降、世界各地の人々はクジラを燃料など産業資源や食料として利用してきた。しかし、クジラと人間の関係は、この半世紀の間に大きく変わった。クジラを捕獲し、利用する人々がいる一方で、クジラを殺傷することを「悪」とみなし、反捕鯨を支持する人々が多くなってきた。本書では、捕鯨と反捕鯨のあいだを揺れ動いている現代の世界における捕鯨の実態、商業捕鯨をめぐる国際政治や環境・動物保護運動の展開、捕鯨に関連するメディアや動物倫理について最新の情報を紹介し、多様な視点から検討する。



応援の人類学



丹羽 典生 編著

定価：本体3,400円+税 332頁 青弓社 2020年12月23日刊行

応援とは普遍的現象なのだろうか。応援には、個々人が行うものから集団を形成して組織だっておこなわれる種類まである。本書では、日本の大学応援団からスポーツの私設応援団、さらに民俗芸能やアイドルファンの声援までを事例として取り上げている。そうしたさまざまな事例の分析を通じて、応援の文化を多角的に描き出すことを試みている。今後、応援という現象について通文化比較する際のひとつの参照点となると幸いである。



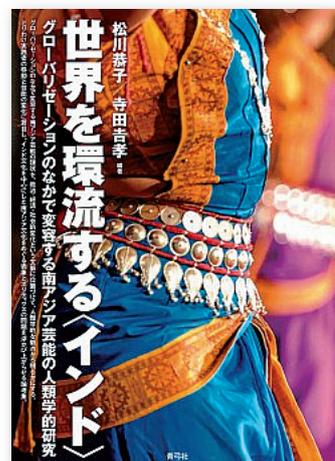
世界を環流する〈インド〉 —グローバル化のなかで変容する 南アジア芸能の人類学的研究

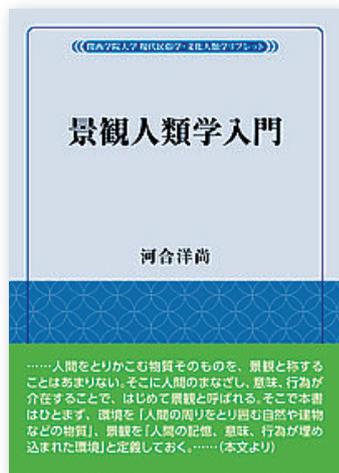


松川 恭子・寺田 吉孝 編著

定価：本体4,400円+税 368頁 青弓社 2021年1月22日刊行

本書は、国立民族学博物館共同研究の成果に新たなデータを追加した論集である。グローバル化のなかで変容する南アジア芸能の現状を、政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけるとともに、21世紀の南アジア文化が、「広域に世界をめぐり、多方向的・可逆的に世界各地に存在する複数の拠点間を循環する」という特徴を「環流」概念により人類学的な観点から明らかにする。特に実践者の移動と音楽・演劇・舞踊などの芸能の変化に着目し、インド文化を中心とした南アジア文化をめぐる表象とポリティクスの問題を浮き上がらせる。





景観人類学入門

河合 洋尚 著

定価：本体900円＋税 98頁 風響社 2020年7月20日刊行

1990年代以降、景観は、社会文化人類学において突如として注目を集めるトピックとなった。それから30年、欧米、日本、中国などでは、景観人類学やそれと関連する研究が豊富に蓄積されてきた。本書は、大学や大学院での教育にも配慮しつつ、景観人類学の視点と方法を紹介した入門書である。具体的には、人間－景観の相互影響関係や世界の景観問題に焦点を当てることで、この学問領域の過去・現在・未来を述べている。また、人間と景観の関係をめぐる複雑な歴史を捉えた研究動向についても、コラムの形式で言及している。



現代手芸考

—ものづくりの意味を問い直す

上羽 陽子・山崎 明子 編

定価：本体2,400円＋税 312頁 フィルムアート社
2020年9月25日刊行

なぜ人はものをつくるのか—世界各地でさまざまなかたちで展開するものづくりにはどのような意味があるのだろうか。本書は、これまで批評・研究の世界で取り上げられてこなかった未開拓の分野である手芸について、「つくる」「教える」「仕分ける」「稼ぐ」「飾る」「つながる」の6つのテーマから迫る、はじめての手芸論である。いちばん身近なものづくりとしての手芸を対象に、文化人類学、ジェンダー研究、美術・工芸史、ファッション研究など多領域の研究者が「手芸」の輪郭をあぶり出しながら、ものづくりの意味を問い直している。

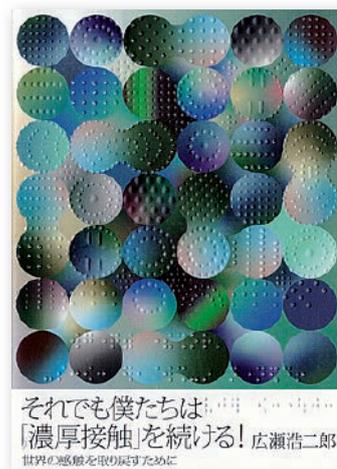
それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！

—世界の感触を取り戻すために

広瀬 浩二郎 著

定価：本体1,500円+税 162頁 小さ子社 2020年10月27日刊行

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、「さわらない・さわれない・さわせない」風潮が社会全体に広がった。「さわる文化」を研究してきた著者は、そんな状況の中であらためて「触」の意義を熟考した。本書は、いわばコロナ禍の副産物である。2020年は自宅や研究室など、密閉された空間で過ごす時間が増えた。自身にとって、もっとも密接な存在である「私」との対話を繰り返す。そして、多様な人々が密集できる特別展の開催に向けて、展示の趣旨・理念を整理する。自分・障害・社会をみつめなおす「3みつ=3密」の濃密な体験から本書が生まれた。本来、「3密」は避けるべきものではない。者・物との濃厚接触は人間のコミュニケーション、文化の創造・発展に不可欠である。さあ、本書を片手に2021年の秋に開かれる民博の特別展「ユニバーサル・ミュージアム 一さわる！“触”の大博覧会」に出かけよう！



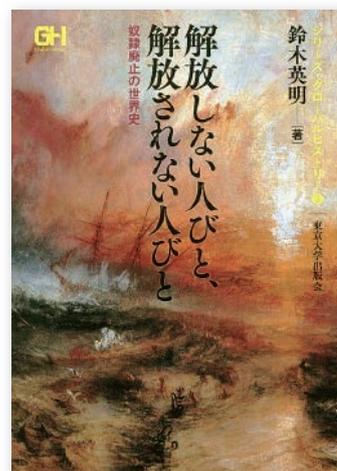
解放しない人びと、解放されない人びと

—奴隷廃止の世界史

鈴木 英明 著

定価：本体2,900円+税 320頁 東京大学出版会
2020年10月30日刊行

奴隷交易や奴隷制と呼ばれるものがこの地球上に古くからあることは広く知られている。そうであれば、なぜそれらは18世紀末から急速に地球規模で廃止されていったのだろうか。また、それらの廃止は各社会や地球全体の何を変え、何を変えなかったのだろうか。そして、現在の私たちはそのどのような延長線上にいるのだろうか。本書はそのようなことを考えながら書いたグローバルヒストリーの著作である。



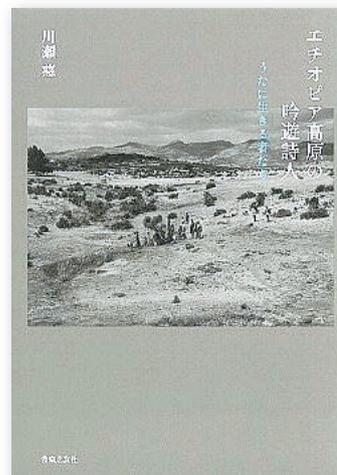
エチオピア高原の吟遊詩人

—うたに生きる者たち

川瀬 慈 著

定価：本体3,000円+税 252頁 音楽之友社 2020年11月10日刊行

本書は、それぞれアズマリ、ラリベラと呼ばれるエチオピアの音楽職能集団が、地域社会において人々との豊かなやりとりに基づいて展開させる芸能の様子を描く。両者のコミカルかつ深遠な歌の世界や、集団が共有する隠語の生成メカニズム、職能者からアーティストへ転身し各国で活躍する近年の様子、パンデミックのなかでの活動などについて紹介する。また、集団の活動を記録した著者の映画制作の逸話や、作品が各国で巻き起こした反応についても報告している。アフリカの地平から音楽・芸能を相対化してとらえ考えることを読者に促す。



■ 基幹研究プロジェクト

	プロジェクト名	研究代表者	研究期間（年度）
機関拠点型プロジェクト／人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築			
開発型	海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化 — 東南アジア資料を中心に	小野林太郎	2019-2021
	中央・北アジアの物質文化に関する研究 — 民博収蔵の標本資料を中心に	寺村 裕史	2018-2021
	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	飯田 卓	2017-2021
強化型	データベース「焼畑の世界 — 佐々木高明のまなざし」の国際化と学際研究の展開	池谷 和信	2020-2021
	津波の記憶を刻む文化遺産 — 寺社石碑データベースのフォーラム型情報ミュージアムへの改良	日高 真吾	2020-2021
	セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化	三島 禎子	2020-2021
	マイクロネシア文化資料のフォーラム型データベースの構築 — 20世紀前半収集資料を中心として	林 勲男	2019-2020
	時代玩具コレクションの公開プロジェクト	日高 真吾	2019-2020
広領域連携型プロジェクト			
	文明社会における食の布置（「アジアにおけるエコヘルス研究の新展開」内のユニット）	野林 厚志	2016-2021
	日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築（「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」内のユニット）	日高 真吾	2016-2021
ネットワーク型プロジェクト			
	北東アジア地域研究	池谷 和信	2016-2021
	現代中東地域研究	西尾 哲夫	2016-2021
	南アジア地域研究	三尾 稔	2016-2021

■ 特別研究

研究課題	研究代表者	研究期間（年度）
グローバル地域研究と地球社会の認知地図 — わたしたちはいかに世界を共創するのか？	西尾 哲夫	2020-2022
デジタル技術時代の文化遺産におけるヒューマニティとコミュニティ	飯田 卓	2019-2021
パフォーミング・アーツと積極的共生	寺田 吉孝 / 福岡 正太	2018-2021

■ 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構は、人間文化の新たな価値体系の創出をめざして、国内外の研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進しています。機関拠点型・広領域連携型・ネットワーク型の3つの類型から構成され、本館でもそれぞれのプロジェクトに取り組んでいます。

■ 特別研究

「現代文明と人類と未来 — 環境・文化・人間」を統一テーマとし、環境、食、文化衝突、文化遺産、マイノリティ、人口問題という課題にかんして、それぞれ3年の研究期間を設定し、国際シンポジウムや欧文での成果刊行を行い、研究を実施しています。この研究を通じて、現代文明を人類学的な視座から再検証することを目的としています。

■ 共同研究

●は館外の代表者

	研究課題	研究代表者	研究期間 (年度)
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
	日本列島の鵜飼文化に関するT字型学際共同アプローチ — 野生性と権力をめぐって	卯田 宗平	2020-2022
	戦争・帝国主義と食の変容 — 食と国家の関係を再考する	宇田川妙子	2020-2022
	海外フィールド経験のフィードバックによる新たな人類学的日本文化研究の試み	片岡 樹	2020-2022 ●
	環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究 — 人類史的視点から	岸上 伸啓	2020-2022
	月経をめぐる国際開発の影響の比較研究 — ジェンダーおよび医療化の視点から	新本万里子	2020-2022 ●
	不確実性のなかでオルタナティブなコミュニティを問う — モノ、制度、身体のみからみあい	森 明子	2020-2022
	「描かれた動物」の人類学 — 動物×ヒトの生成変化に着目して	山口未花子	2020-2022 ●
	グローバル化時代における「観光化/脱-観光化」のダイナミズムに関する研究	東 賢太郎	2019-2021 ●
	島世界における葬送の人類学 — 東南アジア・東アジア・オセアニアの時空間比較	小野林太郎	2019-2021
	社会・文化人類学における中国研究の理論的的定位 — 12のテーマをめぐる再検討と再評価	河合 洋尚	2019-2021
	人類史における移動概念の再構築 — 「自由」と「不自由」の相克に着目して	鈴木 英明	2019-2021
一般	食生活から考える持続可能な社会 — 「主食」の形成と展開	野林 厚志	2019-2021
	オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究	風間 計博	2018-2021 ●
	統治のフロンティア空間をめぐる人類学 — 国家・資本・住民の関係を考察する	佐川 徹	2018-2021 ●
	カネとチカラの民族誌 — 公共性の生態学にむけて	内藤 直樹	2018-2021 ●
	伝統染織品の生産と消費 — 文化遺産化・観光化によるローカルな意味の変容をめぐる	中谷 文美	2018-2021 ●
	心配と係り合いについての人類学的探求	西 真如	2018-2021 ●
	グローバル時代における「寛容性/非寛容性」をめぐるナラティブ・ポリティクス	山 泰幸	2018-2021 ●
	ネオリベラリズムのモラルリティ	田沼 幸子	2017-2021 ●
	人類学/民俗学の学知と国民国家の関係 — 20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	中生 勝美	2017-2021 ●
	文化人類学を自然化する	中川 敏	2017-2020 ●
	課題2：本館の所蔵する資料に関する研究		
	沙流川調査を中心とする泉靖一資料の再検討	大西 秀之	2019-2021 ●
	博物館における持続可能な資料管理および環境整備 — 保存科学の視点から	園田 直子	2017-2021
	課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究		
若手	先住民と情報化する社会の関わり	近藤 祉秋	2020-2022 ●
	感性と制度のつながり — 芸術をめぐる「喚起」と「評価」のプロセスから考える	緒方しらべ	2019-2021 ●
	モビリティと物質性の人類学	古川不可知	2019-2021
	拡張された場における映像実験プロジェクト	藤田 瑞穂	2018-2021 ●

■ 共同研究

特定のテーマについて、館内外の専門家を数人から20人程度集めて研究会をひらき、成果をあげる研究活動です。

バックナンバーのご案内



「民博通信 online」No.1
2020年3月31日発行



「民博通信 online」No.2
2020年9月30日発行

民博通信

— Online —

ISSN 2758-0997

No.3

2021

『民博通信 Online』 No.3 (旧『民博通信』通巻167号)

2021年3月31日

編集委員

卯田 宗平 (編集長)

伊藤 敦規

宇田川 妙子

藤本 透子

編集・発行

人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園10-1

電話：06-6876-2151

<https://www.minpaku.ac.jp/>

制作

株式会社 遊文舎